

生後八か月から漢字を……

いくつかの実例をあげてお話を進めていきたいと思います。沖縄で石井式漢字教育を推進している又吉信一氏は、長男の孝旨君に生後八か月の頃から漢字を教え始めたそうです。半年間に二百字を識別できるようになり、発音こそ明瞭ではありませんが、一歳半くらいでそれらの漢字を読めるようになったといます。一歳半では言葉はまだよくはしゃべれないものです。言語学者の言うところによりますと、一歳半までに30から40くらいの言葉を覚えるのがせいぜいで、とても二百などという言葉が覚えられるものではありません。それが漢字を教えますと、片言ながら二百の漢字を覚えてこれを読むようになったのです。

生後八か月頃というのは、「あーあー」とか「うーうー」とか言い始める時期で、その頃から人見知りを始めます。人見知りするということは人の顔が識別できるということであって、それは相当に目の力が発達したということなのです。顔なんていうものはみんな同じようで、それほど違いがあるものではありません。

だれでも目は二つ、鼻は一つです。ただ鼻の下がちょっと狭いとか伸びているとか、そんなわずかな違いがあるだけで、大体誰でも似ています。しかし、それが母親とそうではない人とを識別できるということは、かなり識別能力が高くなっているということです。そういう時期に、一定の音声と一定の字形とをいつも一緒に見せながら発音して聞かせますと、その音声と字形とが結びついて覚えられるようです。又吉氏に聞きますと、それを根気よく毎日何回かやったのたそうですが、それで漢字を覚え、識別能力がどんどん発達していったようです。

それから、韓国の、かつて天才児だと騒がれた金雄鎔君の場合も、やはり生後八か月頃から母親に漢字を教えられたということです。60枚の漢字カードを与えたところが二日で全部覚えてしまったということもあるそうですが、はじめは一日に1字ずつ教え、それから2字、3字と増やして、ついには20字でも30字でも覚えるようになったようです。金雄鎔君の場合、三歳のときにはもう三千字ほどの漢字を覚えて、どんな本でも大体読めるようになっていたということです。その後七歳でアメリカ

の大学を受験し、合格して入学した、と聞いていますが、それ以後の消息は私は知りません。

次に、現在 32 歳になる私の長男がまだ一歳だったときのお話をしたいと思います。私が炬燵にはいって本を読んでおりましたら、長男が膝の上に這いのぼってきたものですから、その本を、表紙を上にして伏せて置きました。彼は私の膝におさまって、その本『国語教育論』という題名でした をじっと見ていたのですが、いきなり「教」を指して「きょう」と言いました。私は非常にびっくりしたのですが、偶然ということもあると思っていましたら、その隣りの「育」を指して「いく」と言いました。私は早速家内を呼びまして、こんな字を教えたのか」となじるように尋ねました。家内はあっけにとられた顔をしていました。「私は教えた覚えはないし、どうしたってお前が教えたと考えるしかない」と言いますと、しばらくして、「そう言われてみれば、そんなことがあったかも知れない」と言いました。どういうことかと言いますと、家内がその頃読んでいた雑誌に「教育音楽」というのがあって、その表紙の文字を「なあに、なあに」と長男がし

きりに尋ねたものですから、「きょういくおんがく」と読んでやった記憶がある、というのです。しかしそれにしても、たった一回そんなふうに教えただけで覚えられるものだろうかと思議に思いました。いまではそれは充分にありうることだとわかるのですけれども、当時はとても考えられないことでした。だから何か特別なわけがあってそういうことができたのだろうくらいで、それ以上深くは考えてみませんでした。それに関心をもって追究していればもっと早く面白い研究ができたのではないかと、今でも残念に思っております。